

gebend Unterricht geben. Auch gelobe ich besonders den folgenden Artikeln treu zu bleiben:

- 1) Dem Japanischen Kaiserhaus und dem Japanischen Reigh die Treue und die Aufrichtigkeit beweisen und in Sprache und Benehmen ihrer Würde nicht schaden.
 - 2) Ebenso in der Akademie wie ausserhalb der Akademie keine Idee, die der Struktur des Japanischen Kaiserreichs widerspricht, ausbreiten oder nichts zur Sprache und Benehmen bringen, was ihren Verdacht erwecken kann.
- Manfred Gurliitt

Tokio, 30. Juni 1939.

〔サインのみ手書〕

〔外国人教師關係 自昭和十三年至昭和二十四年〕

東音五號

東京音樂學校長

昭和十四年六月廿六日附音席第一三九號上申獨逸國人マンフレッド・グルリットニ外國人講師囑託ノ件許可ス

昭和十四年六月三十日

文部大臣男爵 荒木貞夫 印

〔和文タイプ〕〔外国人教師關係 自昭和十三年至昭和二十四年〕

(十九) デイーナ・ノタルジャコモ Dina Notargiacomo

在職期間 昭和十五年～一九年(一九四〇～一九四四)

外国人講師(昭和十五年～十七年) 傭外国人教師(昭和一九年)
担当科目 唱歌

履歴(要約)

- 一八九〇年十一月五日イタリアのフィレンツェに生まれる。ローマ王立サント・チェチリア音楽院で声乐を学ぶ。
- 一九一九年同音楽院卒業。卒業後、王立オペラ劇場でA・ボイド作曲「メフィスト・フェレ」を演じた。イタリア主要都市で演奏活動を行う一方、国王・女王・皇太后などの前で歌い、その後ヨーロッパのみならず南米チリやフィリピン、中国上海などで広く活動する。
- 一九三七年四月十四日初来日、六月九日東京で演奏会。
- 一九四〇年四月東京音楽学校外国人講師。
- 一九五三年にイタリアに帰国するまで、多くの声楽家を育成した。
- 一九五七年九月二十四日ローマにて没。

〔昭和十二年来日の際の演奏会に関する新聞記事〕

伊國の名歌手女史來朝

歌劇の本場イタリアから『ドラマチック・ソプラノ』の名歌手デイーナ・ノタルジャコモ女史が遙々日本に來朝、イタリア大使館の斡旋でイタリア歌劇の精粹をわが樂壇に紹介する準備中である

女史はローマ第一の王室歌劇場『テアトル・リアーレ』にデビューし其後モリナーニ、パローニ、マスカーニ等の名指揮者の下にジオリ、マルチネリ、バッチスチーニ等の世界的歌手の相手役をつとめて歐米諸國の樂壇に名聲を博した

イタリー大使館ではこの珍客を迎へて日伊交驩の音楽の夕を催すためアウリツチ大使以下、幹旋に努めてゐる、二十七日午後ノタルジャコモ女史はメルカイ大使館一等通譯官同伴で本社を訪れて語る

サクラ見物に十日程前フリリと日本に來ましたが、若し機會があれば東京で獨唱會を開き度いと思ひます

〔東京朝日新聞〕昭和十三年四月二十八日

ノタルジャコモ女史獨唱會

九日後七時、日本青年館、このほど日本を訪れた有名なイタリーのドラマチック・ソプラノ歌手で、當分日本に留つてベルカント唱法を教授することとなり、そのデビュー獨唱會

「ヂヨコンダ」「トロバトーレ」「トスカ」等の歌劇曲を中心に、
豊艶な歌聲を披露する

〔東京朝日新聞〕昭和十二年六月八日

ノタルジャコモ、新響

野村 光一

〔前略〕ノタルジャコモ女史（九日夜、日本青年館）。優れた聲量と聲質を有するドラマテイツク・ソプラノだが、かういふ發想その他舞台向きに大柄に出來た人は、コンサートだけではその眞價が掴み難い。〔後略〕

〔東京朝日新聞〕昭和十二年六月十六日

学校側より、ノタルジャコモ任期延長に必要な奨励資金寄贈の依頼状。

發送十月廿六日

昭和十七年十月二十三日起案

學校長

原田積善會理事長宛

拜啓時下益々御清祥の段奉賀候

陳者アウリーティイ太利亞大使記念伊太利音樂奨励資金御寄贈に關しては竝々ならぬ御配慮を辱うし居り眞に感謝罷在候而して右資金は本校外國人講師伊太利亞國人ディーナ・ノタルジャコモ女史に對する報酬に充當し參り候處資金御寄贈の契約は來年三月末日を以て満期と相成り從て女史の進退延いては本校音樂教育に重大なる影響を及ぼすものとして憂慮致居候

由來本校の聲樂科授業には獨逸系統の聲樂家を備入れ參り候へ共我國音樂教育の發達を期するため優秀なる伊太利亞系の聲樂技術を取入るゝ必要を痛感し日本政府また日伊親善文化交流の見地より之に贊し適當なる伊太利亞聲樂家を物色中の處昭和十五年貴會の絶大なる御援助と駐日伊太利亞大使アウリーティ閣下の御協力の許に前記ジャコモ女史を得以て今日に到り候同女史來任以來聲樂授業の成績は頓みに向上し其の教を請はんとする者頗る多數に達する情況に有之女史の本校授業に従事し居るは我國音樂教育のため極めて有意義且慶賀の至りに存居る次第に御座候就いては來春四月以後も引續き同女史に聲樂授業を擔任せしめ度候へ共政府に於ては獨逸國人教師多數に俸給を支給し居る關係上將來は考慮するとするも今遽にも女史への報酬全額を支給するを得ざる實情に有之候間前述の女史來任の經緯及其後の聲樂教育の成果について御賢察賜はり我音樂教

育振興のため報酬の一部は勿論従来通り政府より補給可仕候へば來年四月一日以降三ヶ年引續き従前通り奨勵資金御寄贈方御高配相煩度此段特に得貴意候

敬具

(手書き) (外國人教師關係 自昭和十三年至昭和二十四年)

三 日本人教師

本項は、東京音楽学校の常勤教官に関して、着任順に学内に保管される履歷事項を要約したものである。

音楽取調掛の助教・助手であった鳥居忱と幸田延については、本百年史『東京音楽学校篇第一巻』第一章第三節同様、略年譜と資料を掲載する。

また遠藤宏の項では、講義ノートの一部を資料として掲載する。

鳥居 忱 (とりい まこと)

(本学に保管される履歷事項に、壬生町立歴史民俗資料館の調査結果をあわせて記載)⁽¹⁾

東京府土族⁽¹⁾

嘉永六年(一八五三)八月二十二日壬生藩江戸大名小路若年寄役屋敷に生

まれる。父忠敦(志摩)三百石、母登與。

安政二年(一八五五)五月四日江戸大名小路若年寄役屋敷に生まれる。

(本学に保管される履歷書による)⁽²⁾

文久元年(一八六一)絵を龜(松本)交山に学び、経を本派本願寺に読む。その後、皇漢学を処士・榊原芳野に、漢学を沼田藩の儒官・川崎魯輔に学ぶ。

文久二年(一八六二)壬生勤王派、江戸家老鳥居志摩一派を追放。国家老鳥居千万之丞・城代家老高須源兵衛失脚。勤王派が藩政を握る。十二月二十三日父(志摩)没す。

明治元年(一八六八)横浜に住み英語を学ぶ。壬生藩二人扶持六兩二分を受く。

明治二年(一八六九)藩に帰り操練武技(兵隊加入・式番隊・一五長)を修める。

明治三年(一八七〇)十一月藩命により貢進生となり、大学南校でフランス語を学ぶ。壬生藩二人扶持五兩を受ける。

明治五年(一八七二)村上英俊に入門。

明治六年(一八七三)中江兆民に入門。

明治七年(一八七四)第一番中学校(後の開成学校)に入り官費生となる。その後、東京外国語学校の官費生となる。

明治十一年(一八七八)官校を退き、更にフランス学を中江兆民に、漢学を芳野金陵、廣瀬青村に、皇学を黒川真頼に、和歌を伊東祐命に学ぶ。

明治十三年(一八八〇)四月三日米国歌教育家メーソン氏の門に入り音楽を学ぶ。九月文部省音楽取調掛伝習生となる。

明治十四年(一八八一)十一月『小學唱歌集』初編出版(歌作担当)。

明治十五年(一八八二)一月音楽取調成績報告大演奏会にて箏、ピアノを受持つ。二月文部省音楽取調掛より證状下附。三月一日音楽取調掛雇を申し付けられる。三月二日助手を申し付けられる。七月メーソン送別演奏会にて演奏。十二月二十六日宿直員兼勤。

明治十六年(一八八三)東京師範学校・学習院で音楽軍歌を教授。三月『小學唱歌集』第二編発表。七月十二日文部省御用掛申付取扱准判任。

七月十三日助教。

明治十七年(一八八四)九月一日同掛依願免当直員。九月二十日教員。

明治十八年(一八八五)東京帝国大学にて音楽軍歌を教授。

明治十九年(一八八六)一月二十一日依願御用掛差免。音楽取調掛雇を申し付けられる。九月二十日兼第一高等中学校雇を申し付けられる。軍歌